

# 4

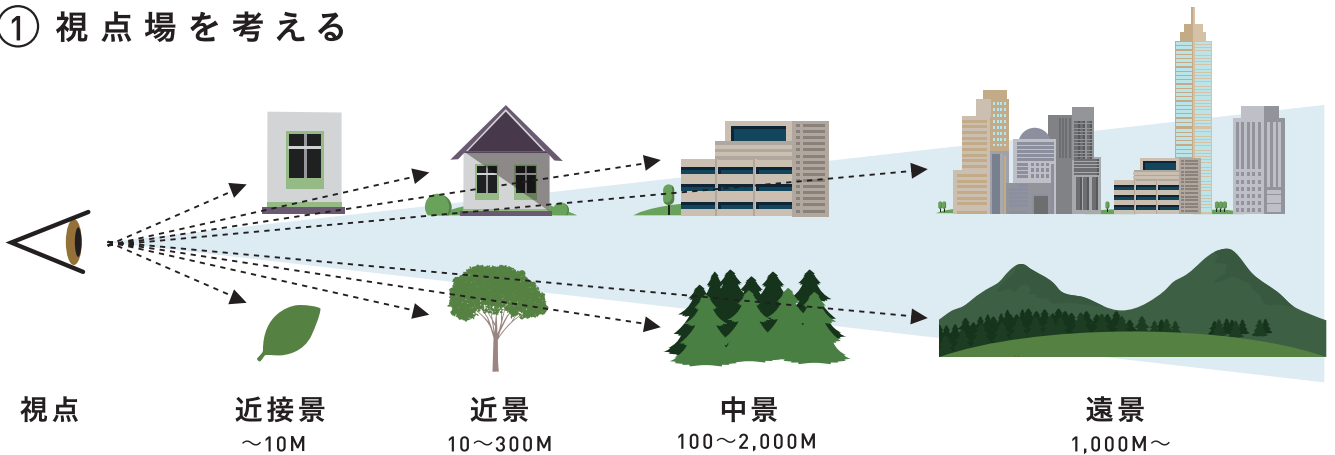
## 調和のための視点と作法

「調和の作法」とは色彩を用いて景観づくりを行なう時の心得です。

当ガイドラインの調和色は地域特性に応じた色彩基準を示していますが、効果的に調和色を活用していただくために必要となる、景観を見る視点と作法をまとめました。

### 4-1 調和のために必要な視点

#### ① 視点場を考える



景観を眺める場所が視点場です。視点場は一カ所ではありません。例えば一つの建築物の色を考える時、距離や向き等を変えたさまざまな視点場を想定し、その建築物がどこから見えるのか、中景で見えるのか、近景しか見えないのか、遠景でもはっきり見えるのか、背景は何か等を確認することが必要です。特に海辺や川沿い、大きな道路沿いに対象物がある場合や高層の建築物は市民から見られる頻度が高いため注意しましょう。

写真は高層のホテルですが、距離や向きにより見え方が異なることがわかります。

#### 距離による見え方

- 近景 ① —— 主に低層部が視野に入ります。素材感がよくわかり、色ははっきりと見えます。
- 中景 ②③ —— 対象物全体とともにその周辺が視野に入るため、その関係性の中で対象物を見ることになります。
- 遠景 ④⑤ —— 対象物は風景の中の一部として見えます。



① からの見え方 (近景)



② からの見え方 (中景)



③ からの見え方 (中景)



④ からの見え方 (遠景)



⑤ からの見え方 (遠景)

## ② 背景や周辺を考える

対象物は単体で見られることはなく、その周辺や背景にあるものといっしょに視野に入ってきます。視点場から見た時に背景にあるものや周辺にあるもの、また、その色を確認しましょう。

### まとめり感をつくる場合

写真は工作物の例です。高層の建築物等の場合、背景は空になることが多いですが、空の色の明るさになじむような色を建築物等に選ぶと違和感なくとけ込んで見えます。同じく背景が山の場合は山の色になじむように色を考えます。低層の建築物等でも周辺にある色に合わせて検討しましょう。



#### 高層の工作物のまとめり感

空が背景になるため、空の明るさにとけ込むよう明るめの基調色を使用しています。



#### 山の中腹のタンクのまとめり感

山の緑の暗さになじむ色を選び、目立たなくして自然の中に設置された人工物の違和感を軽減しています。

### まちのアクセントをつくる場合

写真は周辺を海や緑に囲まれたリゾート施設の例です。

このリゾート施設のようににぎわいやまちのアクセントをつくる場合も背景や周辺の色を考え、周辺景観の特性を引き立てるとともに対象物も大きな空間の中で魅力を発揮するように検討しましょう。



#### まちのアクセントとなる海浜のリゾート施設

大きな空間で広がる海の青や周辺の緑のボリュームに対し、コントラストとなる白い壁、テラコッタ色の屋根でバランスをはかっています。

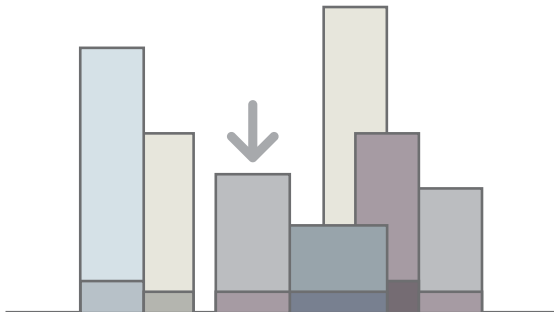
注意しなければいけないのは、単に背景が空だから青にする、山だから緑にするということが背景にとけ込んだりなじんで見せることではないということです。

このように色相を意識して考えがちですが、明度、彩度も合わせて考える必要があり、特に背景と合わせる場合は明度が重要になります。詳細はP15～調和のための作法をご覧ください。

## 建築物等の高さや背景、周辺との関係で色を考える

### 低い建築物の場合の考え方

#### ●背景や周辺がまちなみの場合



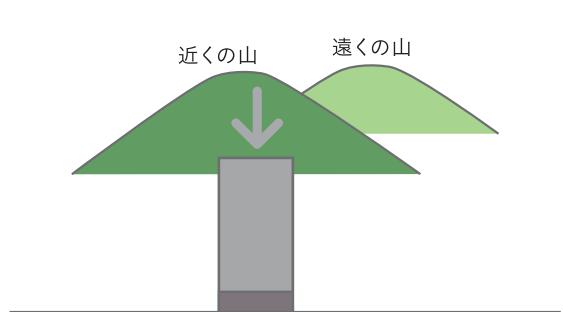
##### 高層部

まちなみの基調の色や周辺の景観を構成する物の明るさに合わせます。

##### 低層部

高層部と同系色で質感の高い素材を用います。

#### ●背景や周辺が山の場合



##### 高層部

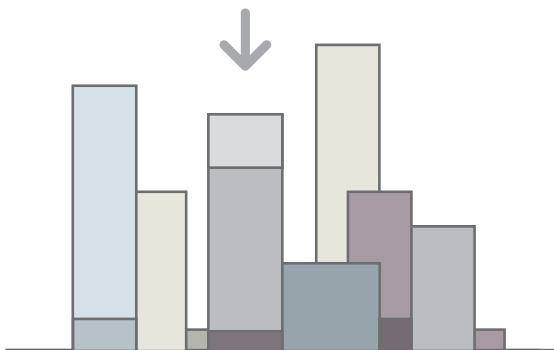
近くの山の明るさに合わせます。

##### 低層部

高層部と同系色で質感の高い素材を用います。

### 高い建築物の場合の考え方

#### ●背景や周辺がまちなみの場合



##### 高層部

まちなみ高層部の明るい背景に合わせた淡い色を用います。

##### 中層部

まちなみの基調の色や周辺の景観を構成する物の明るさに合わせます。

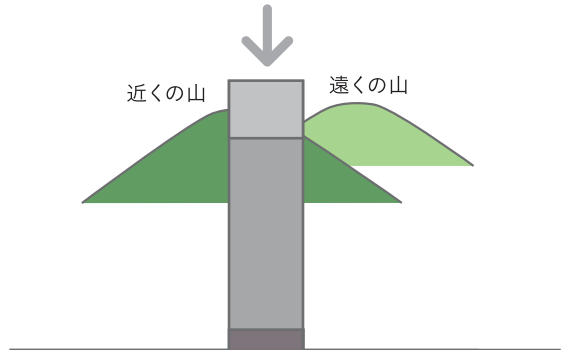
##### 低層部

まちなみの基調の色や背景の落ち着いた色に合わせます。  
質感の高い素材を用います。

#### ※高層部から低層部まで同じ色を用いる場合

まちなみの基調の色をさらに穏やかにした色を用います。

#### ●背景や周辺が山の場合



##### 高層部

空や遠くの山の明るさに合わせます。

##### 中層部

背景の山や山並みの明るさに合わせます。

##### 低層部

背景の山や山並みの落ち着いた色に合わせます。  
質感の高い素材を用います。

#### ※高層部から低層部まで同じ色を用いる場合

遠くの山と近くの山の間での明るさにします。

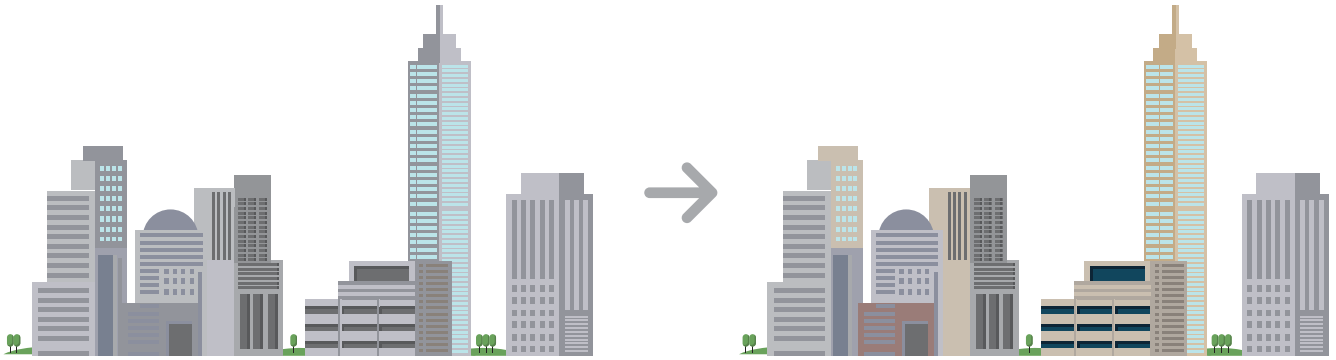
#### ※背景や周辺がにぎわいのあるまちなみの場合の共通の考え方

低層部はまちなみが商業地、都心、広域拠点の場合は通りの連続性を維持し、にぎわい感のある素材や色を用います。

## ② 調和のあるリズムカルなまちなみを考える

先にあげたように福岡の景観には一定のまとまり感が必要ですが、どれも同じ調子ばかりでは単調になり魅力ある景観とはいえません。高さや色の揃った建築物が連なる景観は秩序を感じますが、秩序の中に適度な変化をつくることによって景観にリズムが生まれ、単調さが解消されます。

下図はビル群の様子です。左は同じ色でまとまり感がありますが、退屈な印象を受けます。右図のように色を変えると、リズム感が生まれ親しみやすくなります。ただし、まとまり感を損なわない程度の変化を心がけましょう。



## ③ 素材を考える

人は物を見る時、色とともに素材感も同時に感じとります。素材によって同じ色でも受ける印象が異なるため、対象物や周辺の雰囲気にもふさわしい素材を選びましょう。

特に近距離で見られることが多い低層部に質の良い素材を使用すると効果が高く、景観の質の向上に役立ちます。

石材や煉瓦、木材等の自然素材はあたたかみがあり、長い年月の積み重ねにより味わいが深まります。

場所によって同じ自然素材が多く使われ、特徴を示している地域があります。たとえば海辺の地域で多い板壁を使った地域や早良区の赤瓦の多い地域等があり、このような地域では周辺に合わせて同じ自然素材の使用を心がけましょう。

また、素材を塗料で仕上げる際に、空⇒青、植物⇒緑色、煉瓦⇒赤茶色というように自然や自然素材をイメージした色を用いる場合は、逆に人工的な違和感が強まる場合がありますので注意が必要です。

**板壁の多い海辺の地域**  
例) 志賀島・今津



**赤瓦の多い早良区の地域**  
例) 東入部・早良



**煉瓦をイメージした塗装とタイル張りの例**  
例) 老司・舞鶴





## 4-2 調和のための作法 [色相・明度・彩度の作法]

「福岡の色」との関係や、背景や周辺の状況との関係に気を配り、よりよい景観を市民の皆さんとつくるため、「色相・明度・彩度の調和のための作法」と「各ゾーンの調和のための作法」の2つの作法を定めました。

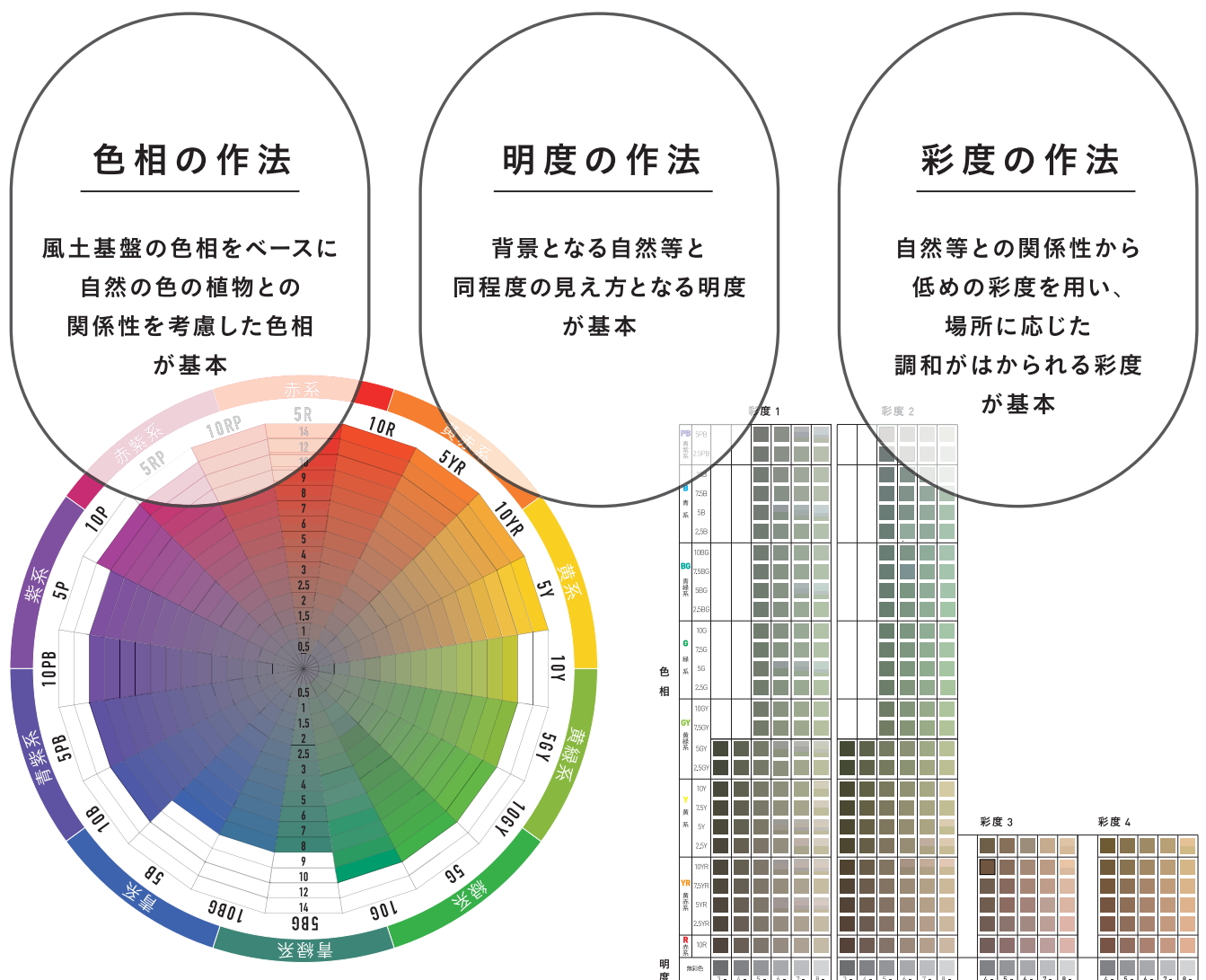
下記は「色相・明度・彩度の調和のための作法」です。当ガイドラインの調和色は地域特性に応じた範囲を示していますが、調和色だけを必ず用いなければならないというのではなく、ご紹介する調和のための作法に則って検討していただくことで調和色の範囲外の色彩も使用できるようなプロセスもガイドラインではご紹介しています。→詳細はP19~の色彩検討のプロセス参照

したがって、調和のための作法には調和色の範囲外の色彩を使用する場合の内容も含めています。各ゾーンの調和のための作法はP45~の各ゾーンと歴史・伝統地区のガイドラインの中に記載していますので併せてご覧ください。

調和の作法 [ 色相・明度・彩度の調和のための作法 ⇒ 下記参照  
各ゾーンの調和のための作法 ⇒ P45~52 の頁参照

### 色相・明度・彩度の調和のための作法

色の属性である色相、明度、彩度それぞれの作法です。



## 色相の作法

風土基盤の色相をベースに  
自然の色の植物との  
関係性を考慮した色相  
が基本

## 風土基盤の色相をベースにするとは？

「福岡の色」の風土基盤の色 10R から 2.5Y までの色相をベースとすることです。

この色相範囲は全ゾーン共通の調和色の範囲で、基調色、補助色、にぎわい色いずれにも広く使用できる使い勝手の良い色の範囲です。

建物の歴史の色は、この風土基盤の土や砂と木材等の自然材を用いたもので、福岡らしい落ち着き感を持った調和が得られるベーシックな色相といえます。



## 自然の色の植物との関係性を考慮するとは？

デザインを考える上で、あるいは少し変化性をもたせたい場合にベースとなる色相 10R から 2.5Y 以外の色相を使用する際には、植物との関係性に考慮する必要があります。

植物の色を意識して植物を引き立てたり、植物に引き立てられるような色相を選ぶように心がけましょう。

この場合お奨めする色相は 5Y から植物の緑の中心色相の 5GY までの範囲です。

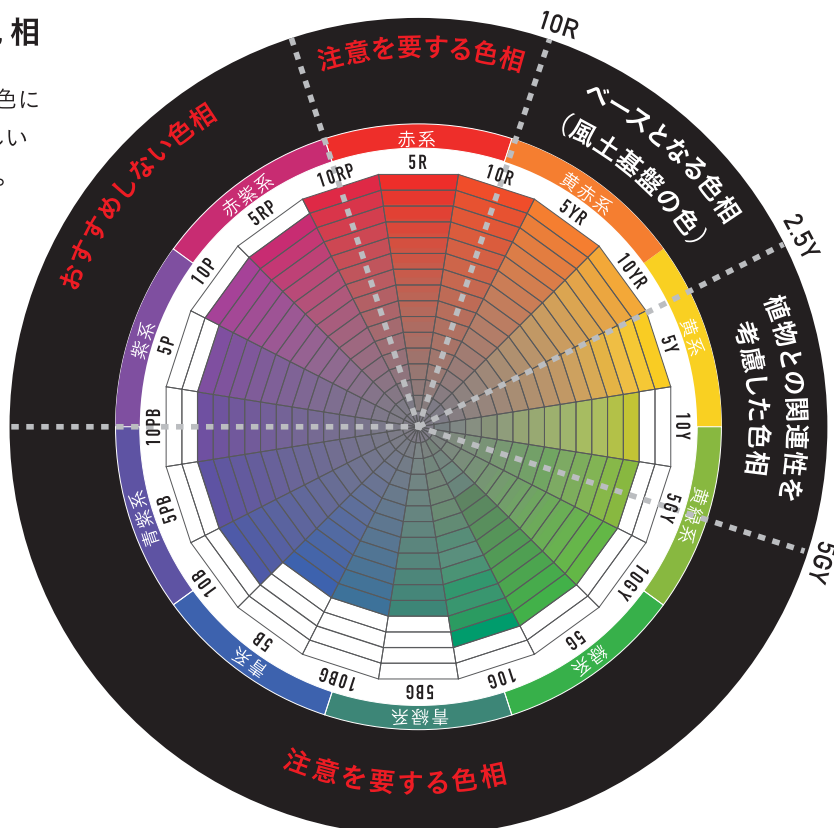
## 使用の際には注意を要する色相

色相 7.5GY、10GY、G は緑色ではありますが、植物の持つ緑色とは実際は異なるため逆に人工的な印象になることがあります。

色相 B、PB は空や海等自然の色ではありますが、自然が持つ本来の色に対して作為的になりやすく、クールな印象が強調され調和感が損なわれることがあります。色相 R(10Rを除く) は派手な印象になりやすいため注意が必要です。

## お奨めしない色相

色相 P、RP は自然の色になじみにくく使用が難しいため、お奨めしません。



## 明度の作法

背景となる自然等と同程度の見え方となる明度が基本

## 背景となる自然等と同明度の見え方となる明度とは？

(P12「②背景や周辺を考える」より)

建築物等一定の立面を持つものはそれだけで目立つ存在となります。対象となる建築物等の背景に何があるかを視点場や周辺から確認し、背景にとけ込んで自然な見え方となる明度とすることが大切です。

### 背景の違いによる明度の作法

#### 空や遠景の山の場合

背景と同程度の明度 7~8 を用いますが、補助色を用いず、基調色だけを用いる場合は明度を背景よりやや暗くしてくすませます。補助色と組み合わせる場合は、補助色を背景に合わせ、基調色は1段階下げ、諧調に変化をつけます。

#### 山の場合

明度 6~7 を用い、上記同様に配慮しますが、山や森等との距離が近い場合は、1段階明度を下げてやや暗くします。

#### 植物の場合

植物との距離が近い場合、植物の樹種や新緑や紅葉時の色の変化も考慮し、相互に引き立つ明度 4~6 とします。概して植物よりも建築物の方が高くそびえる場合は、背景に合わせた補助色を用いるか、やや明るめの基調色とします。

#### 海の場合

明るい空間が広がる場ですので明度 7 以上の明るめの基調色の使用を基本とします。

#### 川の場合

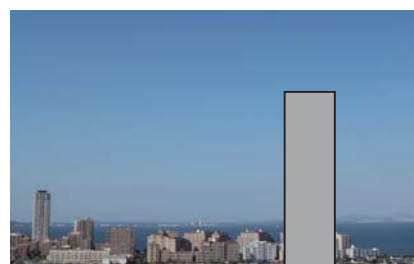
河畔林等の植物の色との関係で落ち着きが得られるよう明度 4~6 を基本とします。

#### 町家の伝統意匠等の場合

町家との連続性を持たせるため、落ち着きが得られる明度 3~5 を基本とします。

#### 建築物等の人工物の場合

明るい明度 7~8 を用いてまちなみの連続性を考えます。タイル等素材感のある材料を使用する場合は低い明度でもかまいません。



## 彩度の作法

自然等との関係性から  
低めの彩度を用い、  
場所に応じた  
調和がはかれる彩度  
が基本

## 自然等との関係性から低めの彩度を用いるとは？

「福岡の色」である自然の色を大切に活かすためにこれらを引き立てるよう彩度の低い色を用いることです。

植物の色（彩度6以下）の他、風土基盤の色の彩度（概ね4以下）、自然材を用いた「建物の歴史の色」の彩度（概ね4以下）これらの福岡の色の彩度より控えめにするのが基本です。

植物の葉の色は彩度6以下ですが、使用する色の彩度を6以下としても色相によっては植物より目立つことがありますので、上記と合わせ半分以下にトーンダウンさせた彩度3以下を基本に、立地する周辺の自然環境に応じた彩度を使用するのが基本です。

## 場所に応じた調和がはかれる彩度とは？

周辺の状況は背景や場所ごとで異なる様相を見せますので、建築物等はそれに応じた彩度とすることが調和の近道となります。

		彩度 1					彩度 2					彩度 3					彩度 4						
色 相	PB 青紫系	5PB																					
		2.5PB																					
	B 青系	10B																					
		7.5B																					
		5B																					
		2.5B																					
	BG 青緑系	10BG																					
		7.5BG																					
		5BG																					
		2.5BG																					
	G 緑系	10G																					
		7.5G																					
		5G																					
		2.5G																					
	GY 黄緑系	10GY																					
		7.5GY																					
		5GY																					
		2.5GY																					
	Y 黄系	10Y																					
7.5Y																							
5Y																							
2.5Y																							
YR 黄赤系	10YR																						
	7.5YR																						
	5YR																						
	2.5YR																						
R 赤系	10R																						
明度	無彩色	3-	4-	5-	6-	7-	8-	3-	4-	5-	6-	7-	8-	4-	5-	6-	7-	8-	4-	5-	6-	7-	8-
彩度		← 低い 1					2					3					4 高い →						

## 彩度別の作法

### 彩度 2 以下

無彩色調のグレイッシュな色になります。  
「福岡の色」の大多数に見られる彩度で、場所を選ばず、  
周辺景観にも溶け込み一体感の得られやすいお薦めの彩度です。

### 彩度 3～4

彩度がやや高くなるため建築物等に用いると福岡の色と主張し合う可能性があります。個性のある場所やにぎわいの場に限定して、リズムカルな変化のある街並みをつくる場合等の使用が適切です。

### 彩度 4～6

特ににぎわいを演出したい場所や、個性を強調したい場合に限定して使用します。